

L'Europe a la recherche d'une langue universelle

著者(英)	Didier Chiche
journal or publication title	Language and Culture : The Journal of the Institute for Language and Culture
volume	12
page range	103-116
year	2008-03-15
URL	http://doi.org/10.14990/00000467

共通語を求めて～ヨーロッパの場合

デイデイエ・シツシュ

現代の国際社会では、英語がまず第一の国際的な共通語とされているが、ひとつの言語が国際的な共通語になるのは、今に始まったことではない。民族や国家が混在するヨーロッパの歴史をふりかえれば、そんな例は少なくない。ヨーロッパでは古代から共通語を必要としてきた。

ヨーロッパでは、紀元前1500年から1000年の間に、インド・ヨーロッパ系の様々な言語が登場したが、国境を越えた共通語の最初の例として、ギリシャ民族の言葉が挙げられよう。紀元前四世紀には、アリストテレスの教え子であったアレキサンダー大王がギリシャ全土を支配し、地中海東沿岸からインドの西の国境に至るアジアを征服する。この広い地域の人々に、大王の軍隊がもたらした言語こそ都市国家アテネのギリシャ語なのである。言語の伝播でエジプトとアジアの一部がギリシャ化し、ギリシャの影響はアレキサンダー大王の死後も続く。ギリシャ語は広い地域での共通語として、最初の国際的な共通語となったと言えるだろう。アレキサンダー大王の死後、帝国は、エジプト王国・セレウコス王国などのヘレニズム王国に分割され、アレキサンダーの部下であった将軍たちが統治していく。ギリシャ文化の影響下で教育を受けた統治者が治めるそれぞれの王国では、先住民や植民地への入植者商人など様々な民族の往来があり、歴史上、最初の多文化社会が形成された。その地域の人々は母国語を話しながらも、ギリシャ語を共通語として使うようになったのである。共通語の存在が文化を深め、交流を盛んにしたと言えよう。その一方で、共通語になったギリシャ語は、普遍性を得た代償として美しさを失ったと結論づけられるかもしれない。便利さゆえに、言葉としての美しさや豊かさ、ニュアンスは失われていったわけである。

ラテン語もギリシャ語に似た運命をたどる。ラテン語は、最初はイタリアのローマ周辺の方言であったが、ローマ人がイタリアを征服するとイタリア全土の共通語になる。その後、紀元前3世紀から紀元後の1世紀にいたる期間に、ローマ人が地中海諸国を征服し、ローマ帝国が拡大されると、ラテン語は帝国西部の共通語になる。しかし、東部、つまり旧ヘレニズム王国では、ローマの支配を受けながらも、ギリシャ語が使われ続けた。ローマ帝国崩壊後の中世以降のヨーロッパで、ラテン語は数世紀に渡り使われ続けるが、学術的用途や教養のために学ばれる言葉となり、ウェルギリウスに代表されるような古典ラテン語（キリスト誕生の頃の 아우グストゥス皇帝時代のラテン語）の美しさを失う。実用的ではあっても、ニュアンスが乏しく、柔軟性に欠けた言語となっていくのである。ラテン語を母国語としない人々が使うために、便利だけでなく、語彙も少なく、文の構成も柔軟性や美しさに欠けるのである。

このように、ギリシャ語とラテン語の例を見ると、ヨーロッパでは古代から、民族や国家を超えた共通語の必要性が認識されていたことがわかる。ある言語圏の拡大と政治的な勢力の拡大は密接にかかわっているが、ギリシャ語やラテン語の場合、共通語となる過程において、効率的なコミュニケーションの道具となったことで、言葉としての美しさやニュアンスが失われた。実際、ギリシャ語には言語に関する概念が二つあった。「グロッサ」と「ロゴス」である。グロッサは単なるコミュニケーションの手段であり、いわゆる「ピジン言語」、つまり、外国人同士が使う共通の言葉に当たる。それに対して、ロゴスは文化的な言語であり、豊かさや深みを持っている。

その後、ラテン語に代わる共通語として最も熱望されたのがフランス語である。17世紀以来、中央集権化のうねりの中で、フランス語の体系化が進み、18世紀になると、フランス語はフランス国家の枠を超えるにいたる。フランスはヨーロッパの大国となり、フランス文化は各国のあこがれの的となる。ヨーロッパの王国諸国はこぞって、ヴェルサイユ宮殿のような宮廷を造り、フランス人哲学者を招くようになるのである。当時、フランス語の優越性はゆるぎなく、例えば、リヴァロルという作家が、『フランス語の普遍性について』と言う有名な文章を残しているが、これは、「何がフランス語を普遍的なものにしたのか？」というベルリン学士院の問いに答えるために書かれた。

リヴァロルはフランス語圏の拡大が政治的な事情による事を認めながらも、この言葉の支配的な影響力を理性的に論じようとしている。フランス語の文章は、主語、動詞と続き、最後に動作の向く対象としての目的語がくる。「これは人間共通の理屈にかなった流れであり、共通の感覚である。」と彼は述べている。そして、「明快ならざるものフランス語にあらざ」という有名な格言にいたるのである。

現代の言語学者に言わせれば、これは錯覚に満ちた大げさな言説であるが、フランス人がフランス語に対していかに大きな信頼を寄せていたかが分かる。また、明快で、曖昧な解釈の余地を与えない言葉として、フランス語が外交の舞台で重要になった理由も納得できる。さて、植民地政策に伴い、世界中にフランスの植民地ができると、各地にフランス語の学校が作られ、住民の子供たちにもフランス語が教えられるようになった。フランス帝国崩壊後も、フランス語圏は5大陸にまたがり、現在、フランス語使用者の半分は、ヨーロッパ圏以外の出身の人々である。フランス語は新たなラテン語になったとも言えるだろうが、違いは大きい。というのも、柔軟性やニュアンスを失った古典語と違って、フランス語に関しては逆の現象が起こった。ピジン語に成り下がることなく、各地の事情に合った語彙や言い回しを持った様々なフランス語の形が生まれたのである。フランス以外のフランス語圏出身である著名な作家も登場し、フランス人が書く文章とはかなり異なるが、味わい深いフランス語で表現している。有名な例は、セネガル独立後、初代大統領となった詩人サンゴール、マルティニック出身の詩人エメ・セゼールで、彼らは、いわゆる「ネグリチュード」(黒人意識、黒人性)と呼ばれる概念を広めた。サンゴールの言葉を借りれば、黒人意識とは、黒人世界

の文化的価値の集大成であり、生活様式や制度や芸術に表現されている。

アフリカの旧植民地諸国が、独立の際フランス語を公用語に選んだのは、政治的に見れば種族の壁を越える必要があったからだが、文化的な理由も存在していた。サンゴールは、フランス語は柔軟であるため、アフリカの言語本来の姿を再現できる、と語っている。

フランス語は、その普及の課程で多様化し豊かになったといえよう。このことから、ある言葉が国や民族を超えて使われ続けるためには、単なるコミュニケーションの道具であるグロッサに留まらず、文化的深みを備えたロゴスとなる必要があることが分かる。異文化圏に属する人々が、自己表現の手段として使用し続けるに値する柔軟性を持った言語のみが、みずからをも豊かにしていくことで、本当の意味での文化交流や文化融合が実現されるのであろう。